

「古文化談叢」第86集抜刷

2 0 2 1 年 6 月

九州古文化研究会

庚寅銘象嵌大刀 謎の一文字「れん」と製作年

鈴木 勉

庚寅銘象嵌大刀 謎の一字「れん」と製作年

鈴木 勉

はじめに

1. 庚寅銘大刀に関する諸説について

- (1) 坂上康俊氏説と東野治之氏説
- (2) 豊島直博氏の製作年
- (3) 筆者の訓読案と製作年の候補

2. 謎の一字「れん」をめぐって

(1) 「凍」と「練」を論ずるための「中平銘鉄刀」

- ① 「中平銘鉄刀」・文字の結体
- ② 「中平銘鉄刀」・文字の章法（配置）
- ③ 銘文の内容
- ④ 蹴り彫り象嵌の蹴りピッチ
- ⑤ 「中平銘鉄刀」の製作地と製作時期
- ⑥ 「中平銘鉄刀」と靈帝信仰

(2) 「練」「凍」「鍊」「煉」の原義とその後

- ① 『説文解字』（後漢）の頃とそれ以前の「凍」
- ② 後漢の鉄刀銘の「凍」
- ③ 後漢から三国時代の鏡銘の「凍」
- ④ 鑄造銅器と鍛造刀剣の銘に同じ「凍」字が使われる
- ⑤ 『塩鉄論』に見える賢良と御史大夫が持つ技術の知識

(3) 「百凍」から「練」へ

- ① 百済の「百練」
- ② 日本列島の「百練」「八十練」
- ③ 古代中国の「凍」から日本列島の「練」へ

3. 「れん」字の決定と大刀の製作年

- (1) 保存科学による「凍」字の決定
- (2) 「庚寅銘大刀」の訓読と570年製作説について
- (3) 発掘担当者大塚紀宜氏の見解から製作年を絞る
- (4) 文字の技術史（筆文字に似せて彫る文化と技術）からみた製作年

- ① 日本列島の線彫り刻銘技術
- ② 朝鮮半島の線彫り刻銘技術の推移

③「庚寅銘大刀」の刻銘技術

④「庚寅銘大刀」の製作年

4. 「庚寅銘」の解釈

はじめに

2018年に刊行された報告書『元岡・桑原遺跡群 30 元岡古墳群G-6号墳・庚寅銘大刀の考察 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1355集』⁽¹⁾では、庚寅銘大刀の銘文は、

「大歳庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二果凍 (or 練)」



図1 庚寅銘大刀の積文

のように積文されている(図1)。積文は最後の文字が「凍」か「練」かが課題として残されている他はほぼ定着をみていると言って良い。しかし、その訓読となると十分なものは示されていないと私は考えている。残された課題は、①最後の文字が「凍」か「練」か、②この文章をどこで切って読むかである。①は積文上の問題、②は銘文全体の理解の問題である。

金属や石や布などに残された文字を扱う金石学を学ぶ者が大変少なくなってきていて、本来の研究作業について誤解が生じ始めているようなので、改めて述べておきたい。金石学でいう「積文」とは、文章を解釈することではなく、文字を「ときあかす」ことを言う。つまり「文」は文章ではなく、文字を意味する。古代の篆書や隸書または行書、草書で書かれた文字の一つ一つを楷書または現代の通用文字に改める研究作業である。

金石学では、積文が先ず大切で、その次にその文章をどう訓読するかという作業の順序になる。仮にある訓読案を考えついたとしても、もう一度積文に戻ってその訓読と積文が妥当かどうかを検討することが求められる。つまり、積文と訓読の作業は永遠にループする作業であり、相離れずに平行して検討され続けなければならない。最後の金石学的理解は積文に戻るということもできよう。また、本銘文の最後の文字が「凍」か「練」かという問題は、銘文の最終的な理解にも大きな影響

を及ぼすという点で大変重要である。

1. 庚寅銘大刀に関する諸説について

(1) 坂上康俊氏説⁽²⁾と東野治之氏説⁽³⁾

坂上氏は、次の様な文章の切り方を提案している。

(坂上氏案)「大歳庚寅正月六日庚寅、日時作刀凡十二果凍(練)」

また、東野氏説を批判して、十二は刀の本数ではなく、用例の通り鍛錬の回数だとしている。

(坂上氏説)

- 練に連なる数字は鉄素材を鍛えた回数を指すとみられること
- 十二は一種の特別な数字であること
- 十二は多いことを意味する数字であること

東野氏は、文章の中央近くの「日時」の間を文章の切れ目としている。

(東野氏案)「大歳庚寅正月六日庚寅日、時作刀凡十二果凍(練)」

坂上氏も東野氏も二つ目の「庚寅」を正月六日につなげている。そこから、年と正月六日がともに「庚寅」にあたる年を暦から探して 570 年だけだとした。

「庚寅」の年は、60 年に 1 回ずつで、510 年、570 年、630 年、690 年、750 年がそれに該当する。

坂上氏、東野氏の説、つまり「正月六日庚寅」を一文とする説に従うと、その後ろの文章が読めなくなってしまう。坂上氏は、銘文の後半部分に言及していないが、東野氏は、金石学者として何とか後ろの文章を読もうとして、次の訓読案を提示した。

(東野氏訓読案)「大歳庚寅正月六日庚寅の日、時に刀を作ること凡て十二、果して凍(きた)う。」

この読みにはいささか無理がある。例えば「十二果凍」であるが「十二本作る」などと読む銘文は坂上氏も指摘するように用例がない。また、「果たして」という現代日本語の読みを当てることも大いに疑問である。これまでの中国と日本の論考では「凍」と「練」を同じ意味で理解し「鍛錬の回数」としている(この問題は大きな問題であるので後に詳述する)。つまり、東野氏は「用例のない新解釈」をしようとしているのだが、用例がない解釈は金石学ばかりでなく、歴史学では通用しない。近年、三角縁神獣鏡の銘文を新解釈しようとした光武英樹氏は、用例のない解釈を提示して、自ら「突飛」と評価し、さらにそれを引用した岡村秀典氏は突飛さをそのまま受け入れて自説の裏付けとしている。⁽⁵⁾ 共に金石学の基本を忘れた行為である。⁽⁶⁾

そこで私は古代の金石文に用例を探した。「大歳庚寅正月六日庚寅」のように「月日・干支」となる金石文は、表 1 に示したとおりである。ところが、日に続く干支がある金石文の場合、その干支の次に来る文は、全て別の文章となっていた。つまり、日に続く「干支」が文の切れ目となっていたのである。東野氏が提示した「大歳庚寅正月六日庚寅の日、」という文章の切れ目には用例がないことが明らかになった。用例がない読みを自分で作るのは「突飛」と評価するしかない。歴

史学としては東野氏案「庚寅日、時、…」を受け入れることはできない。「十二」を刀の本数とした東野氏流の「用例のない新解釈」の二つ目である。であるから、庚寅銘大刀銘文は、①「正月六日庚寅、」と切るか、あるいは②「正月六日、庚寅日時作刀、…」と切るかという選択となる。

①の場合、後ろの文章、つまり「日時作刀凡十二果凍」が読めないのだ。そのため東野氏は無理に「正月六日庚寅日、時に、…」と読む案を作ったのだろう。しかし彼は、用例が無いことまでは調べていなかった。

表1 「月日・干支」となる東アジア金石文の例

No	名称	銘文	西暦
1	赤烏元年銘画文帯神獸鏡	赤烏元年五月廿五日丙午造作明鏡百煉	238年
2	赤烏七年銘画文帯神獸鏡	赤烏七年□月廿□日丙午時加日中造作明鏡百煉幽漳	244年
3	咸寧五年銘埴	咸寧五年三月六日己丑造	279年
4	元康五年銘埴	元康五年八月十八日乙酉造	295年
5	七支刀	泰□四年十一月十六日丙午正陽造百練□七支刀	369年
6	百濟武寧王誌石	癸卯年五月丙戌朔七日壬辰崩到乙巳年八月癸酉朔十二日甲申安厝	524年
7	百濟武寧王妃誌石	己酉年十月癸未朔十二日甲午改口還墓立	529年
8	船氏王後墓誌銅版	阿須迦天皇之末歲次辛丑十二月三日庚寅故戊辰年十二月殯葬	668年
9	戊戌年銘京都妙心寺鐘	戊戌年四月十三日壬寅収槽屋評造	698年
10	下道園勝園依母夫人銅製藏骨器	以和銅元年歲次戊申十一月廿七日己酉成	708年
11	伊福吉部德足比売墓誌銅製藏骨器	和銅三年十一月十三日己未	710年
12	多胡碑	和銅四年三月九日甲寅	711年
13	元明天皇陵碑	養老五年歲次辛酉冬十二月癸酉朔十三日乙酉葬	721年
14	大安麻呂墓誌	養老七年十二月十五日乙巳	723年
15	龍福寺五層石塔	天平勝宝三年歲次辛卯四月廿四日丙子從二位竹野王	751年
16	石川年足墓誌	天平宝字六年歲次壬寅九月丙子朔乙巳春秋七十有五	762年
17	石川年足墓誌	十二月乙巳朔壬申葬于撰津國	762年
18	高屋枚人墓誌	宝龜七年歲次丙辰十一月乙卯朔廿八日壬午葬	776年

(7) 豊島直博氏の製作年

考古学では、遺物、遺跡の状態からその埋葬時期や追葬時期などを推定するので、かなり幅のある解釈になりがちである。そのため、他の確かな研究に無意識に寄りかかりがちとなる。注意が必要な点である。

大刀の製作年代に関する考古学的評価については、豊島直博氏が刀装具の検討から6世紀第IV四半期としている。しかし、報告を精読してみると刀装具の中で唯一年代感を与え

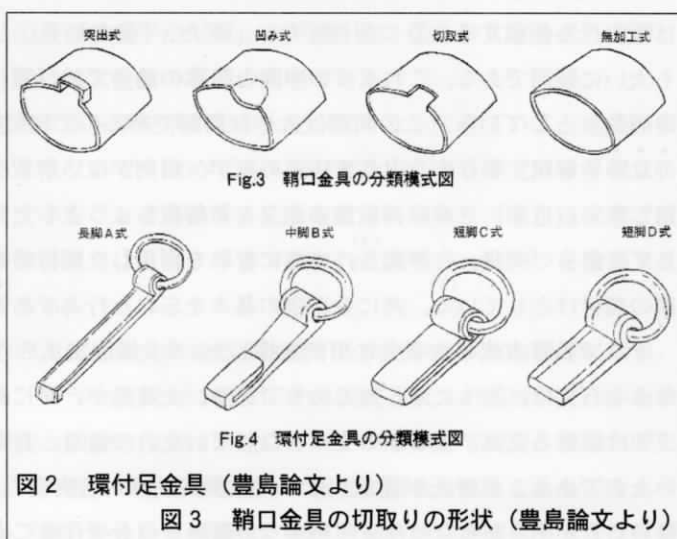


図2 環付足金具（豊島論文より）

図3 鞘口金具の切取りの形状（豊島論文より）

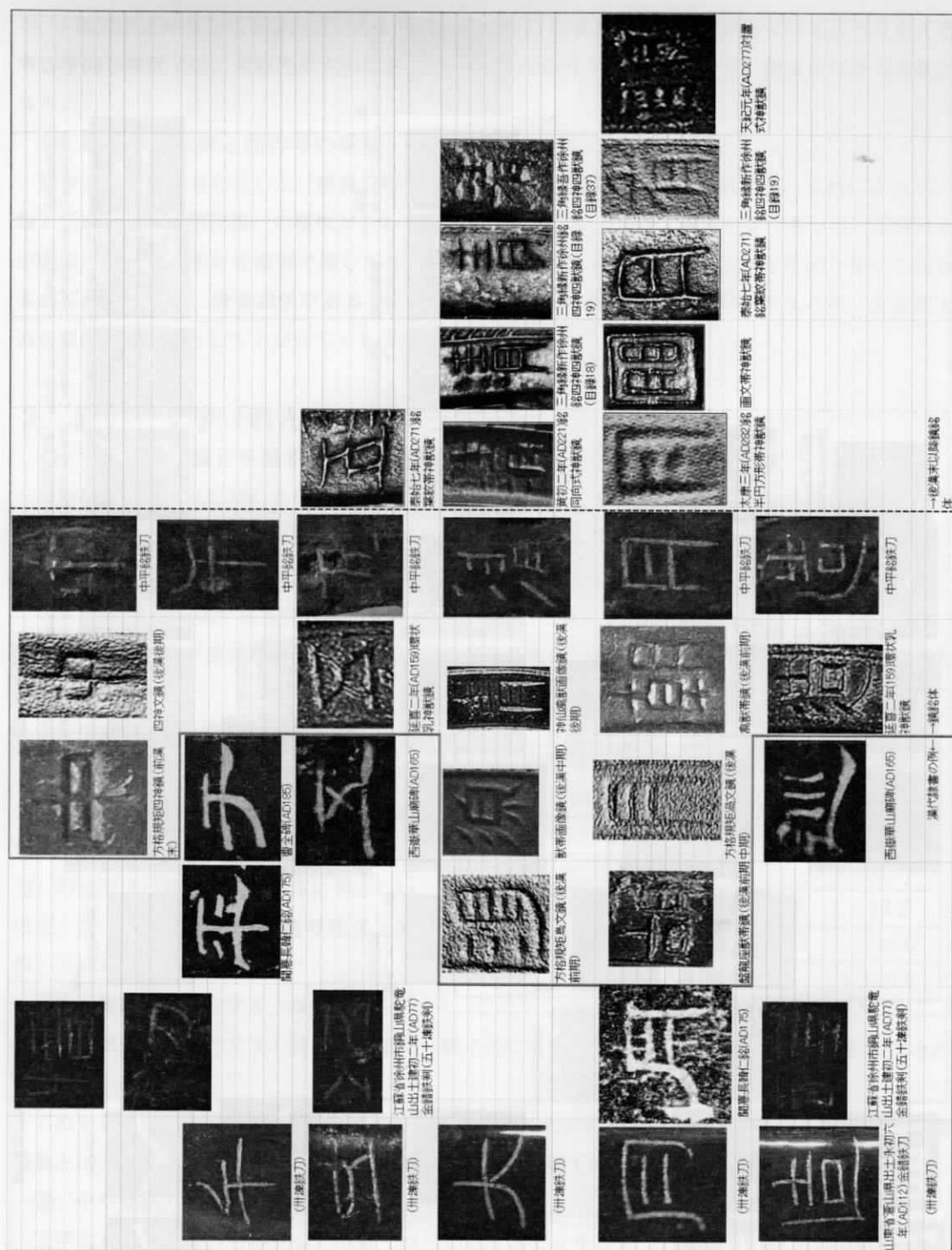


図4 「中平銘鉄刀」の文字と「鏡銘体」との比較①

ているのは環付足金具(図2)だけで、さらに驚くべきことに当の環付足金具は「庚寅銘大刀」には附属していないのだ。附属していないものを年代判定の根拠にできるのだろうか。豊島氏は鞘口金具の切取りの形状(図3)が半円形だから「古い環付足金具が付く可能性が高い」としている

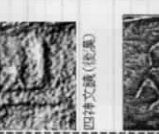
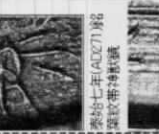
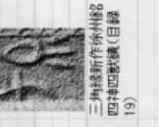
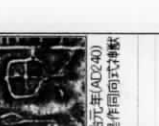
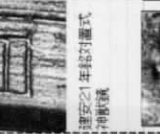
 漢 壽平石鏃 (AD143)	 中平銘鉄刀	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 漢 史長碑 (AD158)	 中平銘鉄刀	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 漢 史長碑 (AD158)	 中平銘鉄刀	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 漢 史長碑 (AD158)	 中平銘鉄刀	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 漢 史長碑 (AD158)	 中平銘鉄刀	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 漢 史長碑 (AD158)	 中平銘鉄刀	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 漢 史長碑 (AD158)	 中平銘鉄刀	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)	 二角銘新作徐州銘 四神四獸鏡(目錄)
--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	---	---	---	---	---	---	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--

図5 「中平銘鉄刀」の文字と「鏡銘体」との比較②

が、不確定要素が余りにも多いといえよう。坂上氏らの570年説に寄りかかっているように思える。考古学的な解釈では、可能性の大小はあっても510年から750年まで全ての庚寅年がその対象となる。

(3) 筆者の訓読案と製作年の候補

筆者は、「、、正月六日」と「庚寅日時、、」を別の文と解釈する案を提示する。これによって、坂上氏の「570年製作説」の根拠が失われることになる。坂上氏は、庚寅の年であって、正月六日が庚寅の日である年を元嘉暦で探して570年としたのだが、文章の切れ目次第で570年にこだわる必要がなくなる。庚寅の年である510年、570年、630年、690年、750年などが、庚寅銘大刀の製作年の候補として上がってくる。

2. 謎の一文字「れん」をめぐって⁽⁸⁾

(1) 「凍」と「練」を論ずるための「中平銘鉄刀」

「中平銘鉄刀」には、「凍」と「練」を検討するためにどうしても解決しなければならない問題がある。

- 文字の結体と配置と銘文が三国時代の鏡銘に酷似していること
- 「中平銘鉄刀」は蹴り彫り象嵌されていること
- 「中平」の紀年銘を持ちながら唯一いとへんの「練」字が用いられていること

である。いずれも「庚寅銘大刀」と重要な関係があるため、本稿では「中平銘鉄刀」の検討から入ることとする。

① 「中平銘鉄刀」・文字の結体

奈良県東大寺山古墳（5世紀前半）から出土した「中平銘鉄刀」の文字の結体は、後漢の文字には見当たらない。「中平銘鉄刀」の文字は「鏡銘体」と呼ぶに相応しいほど、3、4、5世紀の神獸鏡の銘文と酷似している⁽⁹⁾（図4、図5）。

「中平銘鉄刀」の文字を、後漢代から三国までの碑文と鏡銘の文字と縦横の寸法比（横寸法に対する縦寸法の割合）について比較してみた（表2）。

これを見ると、「中平銘鉄刀」の文字が縦長であることがわかり、後漢代の標準的な隸書や後漢鏡銘とは大きな違いが認められ、三国鏡銘の文字とよく似ていることが分かる。

② 「中平銘鉄刀」・文字の章法（配置）

文字の章法（配置）も漢代は、石碑では均等な文字ピッチによって配置され（図6）、蜀地方の象嵌銘では横画・等ピッチ法で並べられる（図7）のに対し、「中平銘鉄刀」では銘文の末尾において「口避不羊」ががつめて配置され、それまでとは全く異なる配置になる（図8）。これは、漢代の銘文には見られない配置である。最後に余白が少なくなると文字が詰めて配置される点など、文字配置の不均等さは三国時代の神獸鏡銘とよく似ている（図9、10）。

表2 字の縦横の寸法比（横寸法に対する縦寸法の割合）

文字	漢碑 (平均)	中平銘鉄刀	後漢鏡銘 (平均)	三国鏡銘 (平均)
五	46.5	84.6	—	84.6
清	—	175	—	185.7
作	62.8	125	88.2	98.2
練	82.6	121.7	166.7	144.6
剛	85.4	150	—	125.4

三角縁神獸鏡の「系譜」はもちろん中国にある。「系譜」が中国にあることは「製作地」が中国であることと同義ではない。三角縁神獸鏡が、中国の鏡作工人が日本列島に渡来し、日本列島で工人集団を形成するかあるいは日本列島の鑄造工人集団に取り込まれて、日本列島の埋葬古墳の近くで出吹きされたことはすでに筆者らが明らかにしている⁽¹⁰⁾。

③ 銘文の内容

「中平銘鉄刀」の銘文は、「重列神獸鏡」(261年)の銘文とよく似ている。

「重列神獸鏡」の銘文例は、

「永安四年大歳己巳五月十五日庚午、造作明鏡、幽涑三商、上应列宿、下辟不祥、……」

「中平銘鉄刀」の銘文は、

「中平□□、五月丙午、造作文刀、百練清剛、上应星宿、□辟不祥」

である。「中平銘鉄刀」が「重列神獸鏡」などの銘文を元にして作られたことが推定できる。



図6 文字が均等に配置された曹全碑（後漢）

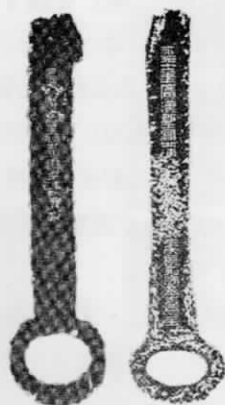


図7 横画・等ピッチ法で配置された後漢蜀地域の象嵌銘（左から 五十涑大刀、光和七年銘象嵌刀子、廣漢銘書刀）

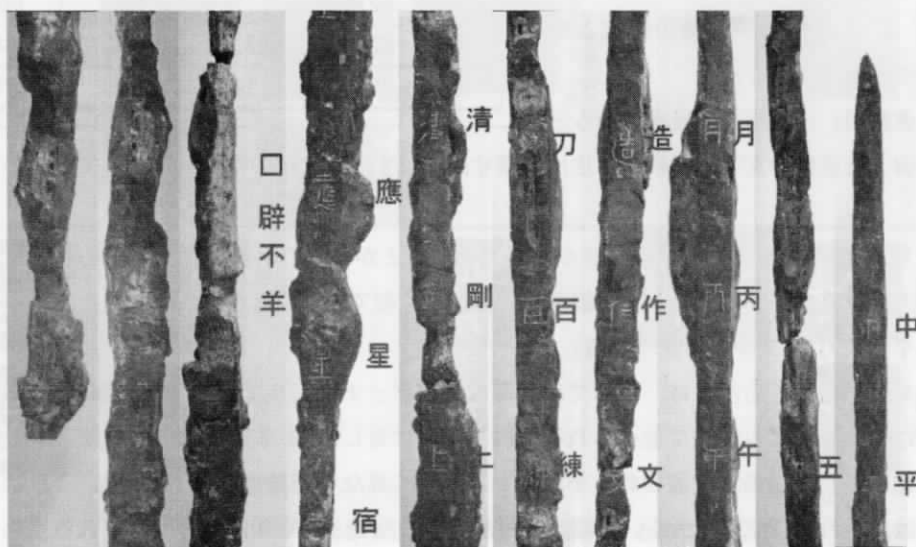


図8 最後の四文字が詰まっている「中平銘鉄刀」の銘文配置

④蹴り彫り象嵌の蹴りピッチ

蹴り彫り象嵌の技術は、中国中原や蜀の製品に精緻な技術が見られる(図11)。しかし、「中平銘鉄刀」は同じ蹴り彫り象嵌に分類されるが技術水準は全く異なっている。蹴りピッチが極端に粗くなり(図12)、双方の時間的空間的距離は極めて大きいと言える。粗い蹴りピッチの蹴り彫り象嵌製品は、朝鮮半島・日本列島で出土していることから、極東アジアの技術と言える。⁽¹¹⁾

⑤「中平銘鉄刀」の製作地と製作時期

以上のことから筆者は「中平銘鉄刀」は、日本列島内で3～4世紀に製作されたと考えている。

金関恕氏は、筆者の説に対して「年号の書き誤りを認めるならば金石学は成立しない」と述べる⁽¹²⁾が、それは誤りである。そもそも金石学は「紀年」を疑うところから始まる学問で、よく知られている問題として、法隆寺再建非再建論争がある。それは、その「紀年」に問題があるところから発している。「紀年」を頭から信用して、本来考古学が扱うべき遺物や文字のかたちなどから時代や製作地を推定する作業を怠ってはならない。かつて中国の孫机氏が中平銘鉄刀を



図9 黒塚31号鏡の銘文 図10 黒塚19号鏡の銘文

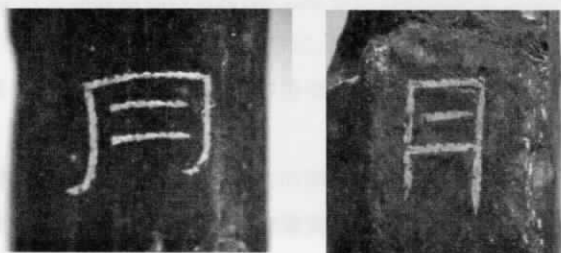


図11 卅凍鉄刀蹴り彫り象嵌 図12 中平銘鉄刀蹴り彫り象嵌

3世紀後半の日本列島での製作と推定する説を出した。⁽¹³⁾ところが日本の考古学界は、大刀や文字に対する研究を怠り、金関氏説を暗黙のうちに支持し、孫机氏説を無視することとなった。筆者は孫机氏説の一部を強く支持する。⁽¹⁴⁾

⑥「中平銘鉄刀」と霊帝信仰

では、なぜ後漢の年号が3、4世紀の日本列島で象嵌されたかという問題が残る。現代では、霊帝の時代というのは政治、社会が乱れ、後漢帝国の崩壊につながったよくない時代ということになっている。しかし、近年霊帝時代の評価に変化が現れてきており、古代日本列島において霊帝信仰が存在したことなどを福井卓造氏が詳しく述べている。⁽¹⁵⁾

霊帝朝とは、そのような漢王朝としての志の高い時代ではなかったか、残念ながら政治的には霊帝は改革途上にして倒れることとなったが、少なくとも儒学や書の乱れを正し、後世にお手本を残したという文化・芸術的においては、霊帝は漢王朝中興の祖たらしめた名君として崇敬に値するといえるのではなかろうか。してみれば、後世の人が霊帝の時代への憧憬の念か

ら漢王朝最終末期の中平の銘を鉄刀に刻するという事も、十分ありうることといえるのではないか。

また福井氏は『新撰姓氏録』などを繙き、「靈帝及びその子孫とされる阿知使主に直接関連する記述」を抜き出している。例えば、二十三の氏族が「後漢靈帝三世孫阿智使主之後也」「後漢靈帝八世孫孝日應之後也」「出自後漢靈帝苗裔奈率張安力也」などと記述されていることを紹介し、『続日本紀』延暦四年六月の坂上苅田村麻呂等が宿禰姓を賜りたいがために提出した次の上表文について次の様に述べている。

『臣等は本是れ後漢の靈帝の曾孫阿智王の後なり。』

つまり古代日本においては、阿知使主の功績の偉大さ、そしてその阿知使主が後漢靈帝の曾孫とされたことから、中国の数多の皇帝の中においても、とりわけ後漢靈帝を信奉する一大勢力があったのではなかろうか。

これまで「中平銘鉄刀」は、「中平」の銘文から後漢の中平年間に作られたもので、4、5世紀まで伝世したと考えられてきた。「伝世」の語は実に便利な語で、すべてのことを可能にしてしまう。十分注意が必要である。

今一つ、現代のことであるが付け加えると、森浩一氏の著書⁽¹⁸⁾につぎのようにある。

会稽東冶の東とする説明があることは東シナ海の横断航路があったことを示唆している。東の到達点の一つが肥後の天草諸島である。天草の豪族の中には後漢の靈帝の子孫という家伝を持った者もいた。

古代から現代に至るまで、靈帝信仰が存在していることを確認できる事例である。3～4世紀の日本列島において、靈帝信仰に根ざす意識があって「中平」の銘を刻んだと考えることができるのではないだろうか。

古代中国には「いとへん」の「練」字を使った銘文が「中平銘鉄刀」以外にないことも、「中平銘鉄刀」が日本列島で作られた可能性を示すものである。中国では後漢代には「涑」の字、三国時代に至って「鍊」の字が使われるようになっている。

以上のことから、「中平銘鉄刀」は、靈帝信仰が存在していた日本列島で3～4世紀に製作された可能性が高いと言える。つまり、いとへんの「練」字は、中平銘鉄刀を除けば中国漢代・三国時代の金属器の銘文には使われず、「涑」字や「鍊」字が用いられた。いとへんの「練」字は「鍛鍊」を意味する鍛造技術を表す語として3～4世紀以降の朝鮮半島や日本列島で使われ始めたものと考えられるのである。

(2)「練」「涑」「鍊」「煉」の原義とその後

「練」「涑」「鍊」「煉」の文字は古代中国においてどのように用いられていたのだろうか。古代

の朝鮮半島や日本列島とは使い方が異なる可能性がある。そもそも古代の中国と朝鮮半島と日本列島では使われた「鉄素材」に大きな違いがあった可能性が高い。

①『説文解字』（後漢）の頃とそれ以前の「練」「涑」「鍊」「煉」

「練」「涑」「鍊」「煉」などの文字はどのように使われたのだろうか。後漢のAD100年頃成立したとされる許慎の『説文解字』には次のように解説されている。

「練、涑繒也从糸束聲」

（練、繒（絹糸）を涑する（煮て柔らかにする）なり、糸に从い、束の聲）

「涑、滴也从水束聲」（涑、滴なり、水に从い、束の聲）

「滴、浙也从水簡聲」（滴、浙なり、水に从い、簡の聲）

「浙、汰米也、从水析聲」（浙、米を汰う也、水に从い、析の聲）

「鍊、冶金也从金束聲」（鍊、金を冶（と）かすなり、金に从い束の聲）

「煉、鑠冶金也从火束聲」（煉、金を鑠冶（とかす）なり、火に从い束の聲）

「練」「涑」「鍊」「煉」の四文字はどれも形聲字で、⁽¹⁷⁾「束」の聲で共通、つまり発音が同じとされる。形聲字とは、基本的な範囲を表す「意符」と発音と意味を表す「音符」の組み合わせで作られた文字を言い、漢字全体の70～80%を占めると言われている。『説文解字』の説明から「束」の聲が意味するところは「液体の中にさらす」であることが分かる。さらに、「練」や「涑」には「とぐ」「精製する」などの意が含まれている。つまり「煉」や「鍊」の中にも「とかしてきれいにする」意味が含まれているのである。

次に、それ以前のことを文献で遡ってみよう。

前漢武帝の頃（BC156～BC87）に成立したとされる『周禮冬官考工記』には「□氏涑絲，以浼水漚其絲，七日，去地尺，暴之。晝暴諸日，夜宿諸井，七日七夜，是謂水浼」とあり、当時は「涑」は、絹糸を長い時間水にさらして精製することを言っていたようである。加藤常賢氏は「涑」の原義を「バラバラにして水につける」としている。⁽¹⁸⁾「涑」は糸を水につけて精製することを意味していたのである。

また、「練」について、加藤常賢氏は『周禮天官・染人』や『淮南子・説林訓』などを引いて「糸を煮て柔軟にして光沢を出す意である。それを引伸して、精熟を称して「練」と言うに至った」としている。「練」も糸を水につけて精製することを意味していたのである。

『説文解字』にも「涑」も「練」も糸を水に曝して精製するものと解説されていることからすれば、後漢に入っても前漢時代の「涑」と「練」の原義が通用していたことがわかる。

一方、「練」「涑」「鍊」「煉」などの用例を捜すと表3のように、前漢末のころから始まって後漢の中頃まで、鑄造銅器の銘文に「涑」字ばかりが使われていた。鑄造工程の中には銅を液体として（溶かして）鑄型に流し込む工程が必須であり、「涑」字は、銅合金の溶解工程を含んだ精製の意味、つまり「とかしてきれいにする」意味で使われていたのである。後の日本列島の「鍛鍊」は鉄素材を鍛造して精製することを意味するが、銅の鑄造では「鍛練」の工程はありえないのであるから、中国の前漢から後漢のころの「涑」は、古代日本の「練」とは意味するところが全く異なっていたのである。

②後漢の鉄刀銘の「涑」

管見では、鉄刀に施された銘文として現在に伝えられるものは表4のとおりである。この「涑」字は鍛練の意味で使われているのだろうか。使われていたとすれば、鑄造銅器の銘文の「涑」とは異なることになってしまう。ここに問題があるようだ。

表3 紀元前の紀年と『涑』を含む銘を持つ鑄造銅器

No	銘文	器物の名称
①	「上林十涑銅鼎、容一斗、并重十斤、陽朔元年(BC24)六月庚辰、工夏博造、四百合、第百一十七」	漢陽朔鼎
②	「陽朔四年(BC21)考工考工為湯官卅涑銅鐘、容五斗重廿三斤、...」	陽朔四年鐘
③	「乘輿十涑銅鼎、容二斗、并重十八斤、永始三年(BC14)、考工工蒲造、...」	乘輿十涑銅鼎
④	「乘輿十涑銅鼎、容一斗、并重十一斤三兩。元延三年(BC10)、供工工彊造、...」	漢元延鼎
⑤	「綏和元年(BC8年)供王昌為湯官造卅涑銅黃塗壺容二斗重十二斤八兩塗工乳御級掾臨主守右丞同守令寶省」	漢綏和黃塗壺
⑥	「建武卅二年(AD56)一月虎賁官冶十涑銅□□鐵百一十枚工李嚴造、...」	京兆官弩鏡
⑦	「建初元年(AD76)楊吳造、四涑八石」	建初元年鏡
⑧	「永元六年(AD94)閏月一日、十涑牢尉斗宜衣、重三斤、直四百、保二親、大富利、宜子孫」	永元熨斗

表4 後漢代の刀剣などへの象嵌銘

No	名称	銘文
①	江蘇省徐州市銅山縣駝龍山出土建初二年(AD77)金錯鉄剣	「建初二年蜀郡西工官王惜造五十涑□□孫剣□」(蹴り彫り象嵌)
②	山東省蒼山縣出土永初六年(AD112)金錯鉄刀	「永初六年五月丙午造卅涑大刀吉羊宜子孫」(蹴り彫り象嵌)
③	永元十□□年(AD99-105)銘廣□郡卅涑書刀	「永元十□□廣□郡工官卅涑書刀工馮武(下漫滅)」
④	永元十六年(AD104)銘廣漢郡卅涑書刀	「永元十六年廣漢郡工官卅涑□□□□□□史成長荊守丞憲主」
⑤	「漢元嘉刀」銘刀(AD153)	「元嘉三年五月丙午日造此□官刀長四尺二□□□宜侯王太吉羊」
⑥	四川省天廻山3号崖墓光和七年(AD184)銘十涑書刀	「光和七年廣漢工官十涑□□服者尊長保子孫宜侯王家富」
⑦	廣漢郡□□□卅涑書刀	「(上缺)廣漢□□□卅□□□秋造護工卒史克長不丞奉主」
⑧	漢廣漢金馬書刀(銘文存七字)	「(上訣)廣漢(中訣)史克長□□奉主」
⑨	漢廣漢金馬書刀(銘文可読者十一字)	「(上訣)年廣漢郡工官(中訣)成長□□丞憲主」
⑩	後漢李元金馬書刀	「巧冶練剛金馬託形、黃文錯鏤兼勒工名」(『太平御覽』)

(注)『太平御覽』は宋代初期に成立。そのため「練」字が使用されたかは不詳。

③後漢から三国時代の鏡銘の「涑」

a. 「幽涑三商」

後漢・三国時代、「涑」字が最も多く使われているのは鏡銘である。林裕己氏によると、後漢⁽¹⁹⁾の鏡で「涑」字が用いられる場合は、多くが「幽涑」と使われている。紀年銘鏡では元興元年(AD105)銘環状乳三神三獸鏡の「元興元年五月丙午日天大赦広漢造作尚方明鏡幽涑三商、...」がある。その後は、「幽涑三商」あるいは「幽涑宮商」と使われていた部位に「合涑白黄」、「幽涑白同」、「幽宮東商」、「幽涑黄白」などと記される。この時代、複数の金属を上手に合金する技術を「幽涑」「合涑」などと表現していたことが分かる。この「涑」は前漢末から後漢にかかるころの鑄造銅器銘の「涑」とよく似た使い方である。合金技術者と撰文者の関係が近かったことが理解できる。

b. 「百煉青銅」

「百煉」の語の初出は後漢の献帝の建安七年（AD202）鏡で「百煉青銅」とあり、その後、東晋・太和元年（AD366）銘を持つ鏡に至るまで、「百煉明鏡」「百煉正銅」「百煉明鏡」「百煉青銅」「百煉清銅」「百煉精銅」などと数多くの鏡銘に同様の用い方をしている。⁽²⁰⁾「百煉」の銘を持つ鏡は総数で54面以上あり、三国鏡銘は「造作明鏡 百煉清銅」、「造作明鏡 百煉青銅」などと用いられることが多く、後漢時代後半の頃に「幽煉三商」、「合煉白黄」、「幽煉白同」などと用いられたのとは様子が異っている。つまり、「幽煉」は複数の金属を溶かし合わせるという合金作業を示していたのに対し、「百煉」は「百煉の清らかな（精製された）銅」という材料そのものへの評価へと変化しているのである。そもそも銅鏡の鑄造の工程は、溶解時に銅と錫と鉛を合金する材料製作工程と、その材料を溶かして鑄型に鑄込む工程があるが、それを同時に行っていた時代から単なる鏡材料（銅合金）を溶かして鑄造する時代に変化した可能性がある。後漢時代の後半には、合金する技術に対する評価が高く、撰文者の目が銅合金（鏡材料）製作の場に向けられていたものが、三国時代になると、すでに合金された素性の良い銅合金（鏡材料）が流通し始め、それを意味する「百煉」の語が使われるようになったのであろう。銘文の解析によって、わずか100年の間に、銅鏡の原材料製作（合金作業）と鏡の鑄造工房の距離が離れてしまった状況が推察されるのである。漢代以来、粗悪銅銭の流通があったことは有名な話である。良い銅材料の入手は当時の鑄造技術者にとって大切な問題であったことがうかがえる。鏡銘に「百煉清銅」などと記述するようになったのは、そうした社会背景の変化があったためと思われる。つまり「百煉清銅」とは、巷間に流通している粗悪な銅素材との差別化を意図した句であろう。三国時代には、由緒の正しい鏡用銅合金材料が広く流通し、ブランド化していた可能性もあるのではないだろうか。

④鑄造銅器と鍛造刀剣の銘に同じ「煉」字が使われる

鏡など鑄造銅器銘と鍛造刀剣銘に同じ「煉」字が用いられていることに、現代日本人で僅かでも技術に理解があれば疑問を抱くのではないだろうか。はがね（鉄）の製錬の工程には、①「鍛錬」つまりはがねを赤熱させて金槌で叩き、時には折り返して層状のはがねとする精製工程と、②銑鉄を溶かして不純物を除去する精製工程の二つがあるのだが、銅の製錬には、②銅を溶かして精製するだけで、①「鍛錬」の工程はない。ましてや鑄造銅器では「鍛錬」に類する工程は全く存在しないのだ。ではなぜ両方に「煉」字が使われているのだろうか。二つの可能性が考えられよう。一つ目は「全く異なる工程を取って同じ「煉」字で表現した」、二つ目は「全く同じ工程だから「煉」字で表現した」である。

全く異なる工程を同じ「煉」字で表現するのは中国の文字文化からは考えにくい。筆者は、表現したい「工程」が全く同じ内容の「工程」であったからこそ同じ「煉」字を用いたと考える。鑄造銅器の銘では「溶かして精製する」意味で「煉」を使い、鍛造鉄器である象嵌銘鉄刀剣の銘の「煉」も「溶かして精製する」意味で使ったのだ。銑鉄の精製工程には「溶かして精製する」工程がある。古代中国では鉄素材は「白銑」として一旦作られるが、「白銑」は銑鉄の一種でとても硬いため、高温を要する脱炭工程を経て硬さとじん性を併せ持つ鑄造鉄器や鍛鉄に変える。その白銑（銑鉄）から不純物を除去するには「溶かして精製する」のである。つまり、刀剣の象嵌銘に「七煉」や「三十煉」や「五十煉」と「煉」字が使われているのは「溶かして精製した」鉄素材を用いたことを表

したと考えられる。後漢時代の「煉」字は古代日本と同じ「鍛煉」を意味しているのではないのだ。

⑤三国時代以降の「百錬」「百煉」の用例

文献に残る「百錬」「百煉」の語は、表5の通りである。三国時代以降の刀剣はほとんど鍛造製と考えられている。そこに用いられた「れん」字は「錬」と「煉」だけで、いとへんの「練」字は使われていない。

表5 文献に見られる「百錬」と「百煉」

No	原因	銘文	備考
①	呉の大皇帝の宝刀	「百錬」	(222年 - 280年)
②	東晋の袁宏	「精金百錬、在割能断」	(317年 - 420年)
③	大夏の赫連勃勃竜昇二年作	「五口の百錬剛刀」	梁陶弘景『古今刀剣録』(408年)
④	北周の庾信の刀銘	「千金類合、百錬鋒成」	(556年 - 581年)
⑤	装景声文身刀銘	「良金百煉、一名展巧、宝刀既成」	
⑥	孔帖潘存実蔵建銘	「雖百煉之鋼、於愛身也奚刀」	

(注) 福山敏男 1968「石上神宮七支刀の銘文」『日本建築史研究』墨書書房より

⑥『塩鉄論』⁽²¹⁾に見える賢良と御史大夫が持つ技術の知識

こうした製作技術上の言葉を、当時の撰文する(文章を作る)人が知っていたのだろうか、という疑問があると思う。現代の日本であればその疑問は当然のことである。現代の学者や官僚で、鉄の精錬と銅の精錬は工程が全く異なっていることを知る人がどれほどいるだろうか。現代の日本であれば、全く異なる工程を同じ文字で表現してしまうこともあるかもしれない。ところが、古代中国では、当時の賢良(文人)も御史大夫(官僚)も技術のことを知り尽くしていた。その実例をご紹介します。

『塩鉄論』は前漢代の塩と鉄の専売制に関する議論の記録である。鉄の専売制では、鉄や鉄器の生産から販売まですべてが国家の直接経営下に置かれた。つまり、専売制の目的は、それまで民が得ていた製造と販売の利益を国家が独占するところにあつたとされる。⁽²²⁾前漢武帝が専売制の利益を独占することによって、破綻した国家財政を救ったことはよく知られている。ところが専売制の改廃については、賢良(文人)と御史大夫(桑弘羊・官僚)によって大いに議論された。その経過を詳細に記録したのが『塩鉄論』である。一部を紹介しよう。

「鉄力は銷錬せず。堅柔は和せず。」

これは、塩鉄の専売制の継続を主張した御史大夫(桑弘羊)が、「鉄器の制作を民間に任せている」という前段があつて、「うまく鉄の力を発揮させることができない。堅さと柔らかさがうまくなじまない。」と言っている。鉄は、堅いばかりではなく、同時に柔軟性が求められる。ここでいう「柔」とは、現代の「靱性」つまり「ねばり強さ」を意味する。日本刀も農具も堅いばかりでなく折れにくく欠けにくいものが好まれる。つまり堅さと靱性という相反する性質を併せ持つ必要があるのだ。そうした技術的専門的な知識に基づいて政治の場で議論されているわけである。

「剛柔和し、器物便なり」

これは、前の文章に続いて御史大夫(桑弘羊)が「剛柔、つまり堅いものと柔らかいもの、両方がうまくまじりあつて、はじめて良い器物ができる」と主張している。

「今、県官鉄器を作るに、苦悪多く、用費省れず」

これは、塩鉄の専売制の廃止を主張する賢良（文人）達が、「(国営の) 県官（鉄官）が鉄器を作るようになって、悪い製品が多くなるばかりで、コストは一向に下がらない」といつている。

「今其の原（もと）を総べ、其の賈を忝にす。器に堅硬多く、善惡擇るところなし」

これは、賢良（文人）達が、「作るところを一カ所にし、価格も同じにすると、容器に固いものが多くなり、「買う人は選ぶことができない」といつている。つまり白鉄製の固い容器はちょっと落としただけで割れてしまうので、そういった割れやすい鑄鉄製品（白鉄）がたくさん出まわって困るということを言っているのである。

以上のように、専売制を継続しようとする御史大夫（桑弘羊）とそれに反対する賢良（文人）達の両方から自説を裏付けるために鉄器の技術的な知識が述べられているのである。堅さと靱性を調和させた良い鉄器を作ることが国の経済を左右することになるという点は、専売制の継続派も反対派も認めているのだ。それは、鉄の技術の神髄であって、現在に至ってもなお技術者たちの最重要テーマの一つである。「剛柔和」のテーマは、鉄に限らず技術に関わる普遍的課題なのだ。こうした深い技術的な課題について、技術者が言っているのではなくて、当時の政治家や文人達が議論していることは驚くべきことである。古代中国では、撰文をする知識人も技術の知識を豊富に有していたことが分かる。そのような彼らが異なる「工程」を同じ文字「煉」で表現することはありえない。

(3) 「百煉」から「練」へ

①百済の「百練」

七支刀は、百済で作られ倭の王にプレゼントされたものであるが、その銘の「造百練^鉄七支刀」の銘文からは、すでに4世紀百済では「練」字が使われており、「百練鉄」という「良い品質の鉄素材」を用いて七支刀を造って」いたことが理解できる。

②日本列島の「百練」「八十練」

a. 「中平銘鉄刀」の「百練」（3～4世紀 日本列島）

「中平銘鉄刀」は、前述したように、日本列島で作られ、「練」字が使われている。「中平□□、五月丙午、造作文刀、百練清剛、上應星宿、口辟不祥」（蹴り彫り象嵌）の銘文では、「百練清剛」という「良い品質の鉄素材」を使って「造作文刀」したことを言っている。

b. 稻荷山鉄剣の「百練」（5世紀 日本列島）

「令作此百練利刀記吾奉事根源也」の部分は「此の百練の利刀を作らしむ。吾が奉事の根源を記すなり」と訓読できる。「百練利刀」については、多くは「幾度も練り鍛えあげたよく切れる刀」と理解されている。この解釈は近現代の刀鍛冶などの鍛造作業を念頭においたものであるため、製作時に「幾度も練り上げた」とされているのだが、これは誤解である。「百練利刀」は名詞として用いられていることが考慮されなければならない。「作此百練利刀」であるから、「百練（の鉄）で作った利刀」という解釈となる。「百練」という「良い品質の鉄素材」が流通していたことがわかる。

c. 江田船山古墳銀象嵌銘鉄刀の「八十練」（5世紀末 日本列島）

江田船山古墳銀象嵌銘は以下のように三段に分けて理解する。

「治天下獲□□□鹵大王世奉事典曹人名无利互」

（治天下獲□□□鹵大王の世、事へ奉る典曹人、名は無利互）

「八月中用大口釜并四尺延刀八十練口十拵三ホ上好口刀」

(八月中、大鉄釜ならびに四尺の延刀を用いて八十練・六十拵す。三つ等(ホ)しき上好の口刀。)

「服此刀者長寿子孫汪」得其恩也不失其所統作刀者名伊太加書者張安也」

(此の刀を服する者は、長寿にして子孫は汪、其の恩を得る也。其の統ぶるところを失わず。

作刀者の名は伊太加、書者は張安なり。)

この「八十練」の銘は、中国から伝来した「百練」という「良い品質の鉄素材」に較べて少しだけ品質的に劣ると自ら評価したものであろう。工人自身が作った鉄素材を自ら評価したものと考えられる。

③古代中国の「煉」から日本列島の「練」へ

以上述べてきたように、古代中国では「溶かして精製する」意味で「煉」字を用いていた。ところが、三国時代に入って流通する良い銅素材を意味する「百煉」へと変わったのである(表6)。ところで、中国における「百煉」は鍛練を意味していない。「溶かして精製した金属」を意味していた。さらに、朝鮮半島を経て日本列島にたどり着いた「良い品質の鉄素材」を「百練鉄」と称し、日本列島ではその後、はがねの精製工程の一つである「鍛練」へと意味を変化させた経過が見える。

表6 「煉」「練」字の推移

AD350 500	AD230	AD230	AD120 200	AD100	AD50 100	00前後	BC2C
「百練」……「良い品質の鉄素材」意 「八十練」……「日本列島では鍛練」意	この頃、「溶かして精製」の意が「鍛練」に変化した 4世紀以後の朝鮮・日本列島	三国時代以後の刀剣銘など 「精金百練」「百練剛刀」など…… 「品質が優れたはがね」意	三国時代の鏡「百煉青銅」など…… 「品質が優れた銅合金」意	後漢代末の鏡「幽煉三商」など…… 「合金する(溶かして精練)」意	『説文解字』「煉」「練」「鍛」…… 「溶かして精練する」意	後漢代の鉄刀剣の象嵌銘、「七煉」「十煉」「十六煉」「卅煉」「五十煉」…… 「鉄鉄を溶かして精練する」意	前漢代の「煉」…… 「糸を水にさらして精製する」意 前漢・後漢の鑄造銅器 「七煉」「十煉」「卅煉」…… 「金属を溶かして精練する」意

福山敏男氏は、古代中国においては、「呉の赤烏元年 238 鏡に「百煉清銅」として煉字を用いるほかすべて煉字(説文によると煉は漸の意であり、広雅は漸を酒の意とする)だけであって、七支刀や江田古墳出土大刀のように練字を用いたものはない。」と述べ、それに続いて「百練」や「百煉」などの用例を挙げている。⁽²⁴⁾ 重要な指摘である。

古代には古代の文字の意味があり、古代中国と日本列島では全く異なる意味で文字が使われていたことに注意する必要がある。現代語の解釈から古代の言葉を類推することには慎重でなければならない。

3. 「れん」字の決定と大刀の製作年

(1) 保存科学による「凍」字の決定

ここでは「れん」字の偏が「さんずい」か「いとへん」かということの問題としたい。旁については「東」と「東」は通用しているのので「東」と理解する。

筆者が進めている金石学は、古代の工人が見ていた景色を再現することを重視する。そのため、「象嵌」では、工人が「溝を彫ったとき」に文字のかたちを見ていることに注目すべきである。つまり、金を嵌める前の溝は工人の目にはどう写っていたか、が積文作業の要点である。

「れん」字の「さんずい（便宜上）」の三画目の溝（図13矢印）に焦点を当てた。金象嵌を表出した「れん」字は、「さんずい」の三画目と「東」字の左はらいが繋がっているのではないかと考えたのである。この場合「溝の深さ（金線の厚さ）」に注目すべきである。例えば、石碑の文字の場合、その溝が「キズ」か「文字線」かを見分けるのだが、通常の文字の溝は、一定のかたちと深さを持っている。しかし、「キズ」の場合は、溝のかたちも深さも文字線とは異なる可能性が高いのだ。その一画が「キズ」か「文字線」かで、積文の文字は劇的に変わってしまうことがあるため注意深く見る必要がある。



図13 「庚寅銘大刀」の「凍」字

象嵌の場合は、より顕著に表れる。私はかつて七支刀銘の積文作業を行った⁽²⁵⁾。従来の石碑など陰刻の文字を扱う金石学では積文作業という、文字線とおぼしき溝に斜め上から光を当てて、そこにできる光の影で文字線を読み取る作業が行われた。しかしこれでは黒い影を観察していることになって、溝の中に残る加工痕が見えない。「キズ」か「文字線」を見分ける手立てがなく、浅い深さのキズとおぼしき溝も文字線と判断してしまうことがあった。その良い例が、七支刀の「晋」字である。「晋」字の第三画と第四画が浅い溝であるにも関わらず文字線と判断されてしまったのだ。第三画と第四画は浅い溝でとても金線が入らないことからキズと判断でき、⁽²⁶⁾「音」字と確定した。「晋」字と積文したことから、百済と東晋との関係が取りざたされ、大きな誤解を生むこととなった。

江田船山銀象嵌銘では、「拊」字の積文で東野氏は、古谷毅氏の「観察」で指摘されている「君」字の第一画目の縦線のはっきりした文字線を見落としてしまい「振」と積文してしまった。また、「ホ」字では線画の見落としがあって、「ホ」字を「寸」字と積文してしまった。どちらも「象嵌の溝」を見落としたのである。⁽²⁸⁾「ホ」字の用例についても気を配って欲しいところである。それぞれの文字の積文の判定基準は、溝のかたちと深さから文字線かキズなのか腐食なのか、を判断することにある。

象嵌の文字線の溝のかたちや深さが、永い期間土の中にあって大きく変わってしまうことが指摘されている。⁽²⁹⁾これも新しい金石学には大切な情報であろう。

象嵌の文字線の溝のかたちと深さは、嵌まっていた金銀の線のかたちと太さとなって残る。そこで私は、福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏と松園菜穂氏の力をお借りして象嵌線の金線の深さを測定したいと考えた。比佐氏と松岡氏はいろいろと工夫してくださった。その作業は、重要

文化財指定のために庚寅銘大刀がセンターを離れる一日前のことであった。その結果得られた画像が図14である。

「束」字の左はらいを横方向から（刀身の右下から）撮影したX線写真である。一本の文字線に見える金線の深さに違いが認められた。これによって「束」字の左はらいの溝が浅く、「さんずい」の第三画の溝が深いことが判明した。この「れん」字は「練」ではなくて「凍」と釈文された。保存科学の勝利であろう。



図14 「庚寅銘大刀」の「凍」字のさんずいの三画目と「束」字の左はらい（文字線の深さが異なる）

これにはもう一つ別の判断要素があるので、それを紹介する。庚寅銘大刀には日本列島人や朝鮮半島人では理解できない文字が使われている。それは「果」字である。

「果」は形声字の「棵」または「𢵿」の意符の省略であろう。いずれも「クア」の音符で近似した意味を示す。「棵」は「棵敢＝果敢」で「果」と同義で現代語では「よく」の意。「𢵿」は「よく打つ」「たたく」の意である。従って「果」は「棵敢＝果敢」の「棵」で「形声字の意符の省略」で「果」と記されたと判断される。「果凍」は「棵凍」で「よく精製す」の意となる。「形声字の意符の省略」は、漢文が母国語ではない朝鮮半島人や日本列島人ではできない操作である。朝鮮半島人や日本列島人は、「棵」と「果」は全く別の意味の文字と理解せざるを得ない。ところが中国の中原に生活する人の間では、「棵」と「果」は発音は同じであるから、ときに同じ意味で用いられる。「凍」字の使用も中国出身の文人の撰文を窺わせる。「果」字と「凍」字の使用から、庚寅銘大刀の銘文の撰文は中国系文人の手になるものと推定される。ちなみに、さきたま稲荷山古墳金象嵌銘鉄剣は「形声字の意符の省略」は一文字も認められない。5世紀の日本列島人では漢文を作ることができないと考えられることから、渡来した朝鮮半島人の手になる銘文と判断できる。江田船山古墳銀象嵌銘鉄刀の文字には「形声字の意符の省略」は認められず、さらに古代朝鮮半島と日本列島でのみ通用していた「𠂔」字すなわち「等」字があることから渡来した朝鮮半島人の手になる銘文と考えられる。一方、七支刀銘は、随所に「形声字の意符の省略」が認められるとともに、説文解字の論ずるところに全ての文字が当てはまる。そのことから中国、それも許慎の出身地である河北省に近い地域出身の人の手になる銘文と推定できる。⁽³⁰⁾

以上のように、伝統的な学問である金石学も新しい科学の力を借りなければならない時代になってきた。もはや拓本や実物観察だけでは最も重要な「釈文」を正確に行うことができない。今回の調査は比佐、松園両氏の執着心がなければなし得なかったと考えられる。三次元測定、X線写真、X線CT画像などなど新しい科学装置が伝統的な金石学を根本から変えようとしている。考古学も

手をこまねいている訳にはいかないだろう。今後は保存科学研究者との親密な協力関係が必要となることに疑いはない。

(2)「庚寅銘大刀」の訓読と 570 年製作説について

ここで「庚寅銘大刀」の釈文と訓読案を提示する。

〈釈文〉「大歳庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二果凍」

〈訓読〉「大歳庚寅の正月六日。庚寅の日時に刀を作るに凡（すべ）て十二果（慄）凍す。」

「大歳庚寅」の年は、510 年、570 年、630 年、690 年、750 年がある。正月六日が庚寅の日という理解では 570 年だけが該当するが、これでは銘文の後半を読むことができず、銘文として成り立たないのだ。そこで私は、「正月六日」と「庚寅」の間を文章の区切りとした。「凡」は「すべて」「しめて」の意。「庚寅の日時に刀を作るに凡（すべ）て十二慄凍す。」と訓読する。つまり、正月六日は庚寅の日ではないのである。となれば製作の年として、510 年、570 年、630 年、690 年、750 年が候補に挙がってくる。

(3) 発掘担当者大塚紀宜氏の見解から製作年を絞る

ここで「庚寅銘大刀」の考古学的な出土状況が大切な情報となる。発掘担当者の大塚氏と筆者とのメールのやりとりを紹介しよう。

2019 年 2 月 3 日（筆者から大塚氏へメール 抜粋）

大塚さま

昨年の 1 月 16 日に、築造時期について、比佐さんから大塚さんの考え（結論だけ）をお聞きしました。大塚さんは「690 年は難しい」と仰っていたとのことでした。以前、明治大学でお目に掛かったときに、「670 年くらいまでは下げることが可能ではないか」と伺ったおぼろげな記憶があります。

細かい築造時期について、どのようにお考えでしょうか？

- 土器がその基準となっているのか？
- 刀剣が基準となっているのか？
- その他何を基準として考えておられるのか？

教えていただきたいのです。

その基準に対してプラスマイナス何年くらいの推定の幅があるのでしょうか？〈後略〉

2019 年 2 月 4 日 大塚さんからの返事メール（抜粋）

石室内からの出土土器は 7 世紀前半～中頃のもので、これらの土器は追葬時の土器とみられますが、個数や内容から見て複数回の追葬が考えられています。そして、庚寅銘大刀の副葬年代は、大刀の出土位置からみて最終追葬時のものとみられ、7 世紀中頃であろうと考えています。（あくまでも、大刀の横にある、玄室内で最も新しい時期の須恵器が大刀に伴うものと仮定しての話ですが。）

石室の構造も、「大型の石材を使用している」「玄室の大きさが比較的大きめ」などの要素を持つことを踏まえると、6世紀末～7世紀初頭に北部九州で築造された石室と考えても全く無理はありません。〈中略〉

出土状況から見た庚寅銘大刀の製作年代も、「最終追葬とみられる7世紀半ば以前の時期」以上のことは言えない状況です。（これも、「最終追葬以後に大刀だけ玄室内に供えた」可能性もゼロではないのですが、これについては出土状態から得られる証拠が何もないのであくまでも可能性にとどまります。少なくとも、大刀が敷石上に直接間安置され、敷石との間に堆積層が見られないこと、敷石上面と11世紀後半代の面（中世に開口していたことが確認されています）の間に30cmの堆積層があり、層位の攪乱がないことから、大刀が置かれたのは7世紀半ば～7世紀末の時期幅に限定されそうです。）〈原文のまま、後略〉

以上のメールのやりとりからすると、570年、630年、690年（可能性はゼロではない）が「庚寅銘大刀」の製作年と範囲として良いようである。

（4）文字の技術史（筆文字に似せて彫る文化と技術）からみた製作年

①日本列島の線彫り刻銘技術

日本列島に文字の彫刻技術が入ってきたのは6世紀末のことである。中国、朝鮮半島を経由して小金銅仏の製作技術と共にもたらされた。その技術は毛彫り刻銘技術と言って一回の毛彫りがねの動きで一本の文字線を彫る技術であるが、その元となったのは朝鮮半島的小金銅仏であり、そのルーツは中国にある。朝鮮半島の毛彫り文様の初例は百済金銅大香炉（567年以後）の毛彫り文様⁽³¹⁾であり、毛彫り刻銘としては王興寺金銅舍利銘（577年）を挙げることができる。朝鮮半島ではその後中国のさらい彫り刻銘技術の影響をすぐに受けて、毛彫り刻銘技術が発展的に成長することはなかった。ところが、日本列島では、導入当初は稚拙な毛彫り刻銘技術であったが、それから200年足らずの間に見事なまでの技術水準に発展し、列島独自の技術として発展する。その発展の過程を筆者は、第一期（導入期）、第二期（進化期）、第三期（完成期）の三期に分けて整理した。それを紹介しよう。⁽³²⁾

第一期（導入期）：法隆寺甲寅銘釈迦光背銘（594年）、法隆寺辛亥年観音菩薩立像銘（591年・651年）、野中寺弥勒菩薩像銘（666年）などに代表される銘文で、図15のように、文字は単調な直線が組み合わされている。概ね初期から670年前後までの時代である。

第二期（進化期）：船王後墓誌（668年）、小野毛人墓誌（677年）、長谷寺観音菩薩立像銘（702年）などが代表的な銘文で、図16のように筆文字の起筆（彫り始め）・収筆（彫り終わり）でたがねの方向を強引に変えて「墨だまり」や「筆を抜いた痕跡」を表現しようとしている。670年前後から8世紀初頭までの時代である。

第三期（完成期）：興福寺勧禅院鐘銘（727年）、山代忌寸墓誌（728年）、小治田安麻侶墓誌（729年）、石川年足墓誌（762年）などに代表される銘文で、図17の様に筆文字の線の肥瘦、抑揚、勢い、流れなどをたがねで表現できるようになる。8世紀初頭から後半にかかる時代である。

つまり、7世紀後半になって、筆文字らしい柔らかい表現が可能になる。文字線の起筆部ではたがねの進行方向とは異なる角度でたがねを入れ、収筆部でもそれまでのたがねの進行方向とは異

なる角度でたがねを抜く。時には横面に見られる筆の抑揚や変化を表現するなど、硬質な感じになりがちなたがね加工で柔らかな筆致を表現しようとする。あくまでも筆で書いた文字に似せようとする彫金技術の進化・発展の仕方は、中国や朝鮮半島には見られない。奈良時代に花開いた日本列島独自の文化である。これらを筆者は「流れの文化」と呼ぶ。

②朝鮮半島の線彫り刻銘技術の推移

百済・伽耶では、七支刀(図18)のなめくり象嵌技術に始まり、5世紀の打ち込み象嵌やなめくり象嵌の技術(図19, 20)へ、そして6世紀のなめくり線刻技術(図21)を経て、6世紀後半の金銅大香炉の毛彫り技術(図22)、6世紀後半から7世紀前半の舍利函銘など(図23, 24)の毛彫り刻銘技術へ

と推移していくが、厳密な筆文字の表現には至らない。一方、新羅では5世紀に⁽³³⁾ 糸智王銘装飾大刀銘や慶州皇南大塚北墳「夫人帯」銘銀製帯金具銘に「なめくり引き」の技術が新たに生まれ、6世紀後半から7世紀にかかる頃にわずかに毛彫り刻銘の事例が見られるが、とても筆文字の柔らかさを表現できる水準に達しなかった。

朝鮮半島の線彫り刻銘技術は、百済も新羅も筆文字に似せるレベルに達していない。中でも毛彫り刻銘技術は、百済に導入されるがその後消失してしまい朝鮮半島独自の発展をするに至らなかった。日本列島とは異なる発展経過と言える。

③「庚寅銘大刀」の刻銘技術

ここで、「庚寅銘大刀」に戻ってよく観察してみよう。「庚寅銘大刀」は粗い蹴り彫り象嵌技法で彫られていることが報告されている⁽³⁴⁾(図25)。粗い蹴り彫り象嵌の起源は百済や伽耶にあり、銘文



図15 第一期(導入期): 左から模式図、法隆寺甲寅銘釈迦光背銘(594年)、同・辛亥年観音菩薩立像銘(591年or 651年)、野中寺弥勒菩薩像銘(666年)



図16 第二期(進化期): 左から模式図、船王後墓誌(668年)、小野毛人墓誌(677年)、長谷寺観音菩薩立像銘(702年)



図17 第三期(完成期): 左から模式図、興福寺勸修院鐘銘(727年)、山代忌寸墓誌(728年)、小治田安麻侶墓誌(729年)



図 18 七支刀銘

図 19 昌寧校洞 11 号墳有銘円頭大刀

図 20 東博蔵有銘円頭大刀



図 21 武寧王陵銀製釧（部分、523 年ころ）



図 22 毛彫りの初例：陵山寺址出土百済金銅大香炉（567 年以降）



図 23 王興寺址 青銅製舍利函の毛彫り銘（577 年）

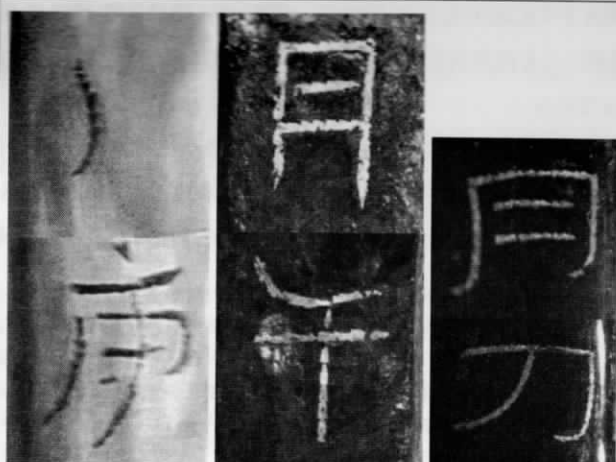
図 24 弥勒寺址金製舍利奉安記の毛彫り銘（639 年）

では、先に詳しく述べた「中平銘鉄刀」の蹴り彫り象嵌がある⁽³⁵⁾（図 26）。

「中平銘鉄刀」は 3～4 世紀の間に日本列島で作られたと考えられ、「中平銘鉄刀」と「庚寅銘大刀」は、細かく精緻な中国中原の蹴り彫り象嵌⁽³⁶⁾（図 27）とは大きな時間的・空間的距離があると推察される。後漢代から数えて 300 年から 500 年の後に遠い極東アジアの日本列島で製作されたと考えるに相応しい技術だと言えるだろう。

「庚寅銘大刀」の文字は筆文字によく似せて彫られていることが分かる⁽³⁷⁾（図 28）。例えば「作」字の第一画第二画（にんべん）はともに、起筆から収筆に至る抑揚までも表現されており、第四画の横画の収筆は右下に抜いている。その他の文字も横画縦画共に筆の抑揚が表現されている。6

世紀の朝鮮半島にこれだけの水準の刻銘技術は見当たらない。日本列島で、早くとも670年以降、遅ければ720年以降に刻銘可能な技術水準と言える。ほぼ同水準の文字として東大寺金堂鎮壇具の陽剣と陰剣の象嵌銘(図29)を挙げることができる。初唐の文字の特徴をもつ陽剣と陰剣の象嵌銘に優るとも劣らない「庚寅銘大刀」の文字は、技術もさることながら、その技術の元となる文化の力なくしては生まれ出るものではない。



庚寅銘大刀(X線) 中平銘鉄刀 蒼山県永初六年銘大刀
図25 26 27 蹴り彫り象嵌



図28 庚寅銘鉄刀「庚寅、作刀」

図29 東大寺金堂鎮壇具の陽剣と陰剣の象嵌銘

④「庚寅銘大刀」の製作年

発掘担当者大塚氏によれば、7世紀末年を示す共伴遺物はないとのことである。しかし、「庚寅銘大刀」は追葬された遺物の一番上に置かれていたことから、時代的な下限として7世紀後半まで視野に入れているという。従って筆者は、前項で挙げた「庚寅銘大刀」の製作時期の候補、570年、630年、690年から、690年を第一候補としたい。朝鮮半島と日本列島の文字の技術史の変遷から、日本列島の7世紀後半以後の作と考えたいところである。第二候補として西暦630年とするが、これは「文字の技術史」の立場からは極めて可能性が低いと言わざるを得ない。

4. 「庚寅銘」の解釈

最後に筆者が示す釈文と訓読(案)を示す。

〈釈文〉「大歳庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二果凍」

〈訓読〉「大歳庚寅の正月六日。庚寅の日時に刀を作るに凡（すべ）て十二果（慄）凍す」

〈解釈〉「大歳庚寅の正月六日。庚寅の日時に刀を作るに、すべて十二果凍（よく精製したはがね）を使って。」

銘文の製作者は形聲字の意符の省略が普通に行うことができる中国系の渡来人であろう。大刀の製作年は、第一候補として 690 年、第二候補として 630 年を挙げて、本稿の結論としたい。

〔〒 110-0003 東京都台東区根岸 5-9-19 工芸文化研究所内〕

【註】

- (1) 福岡市教育委員会 2018『元岡・桑原遺跡群 30 — 元岡古墳群 G-6 号墳・庚寅銘大刀の考察 — 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1355 集』
- (2) 坂上康俊 2018「庚寅年銘鉄刀製作の背景」『元岡・桑原遺跡群 30 — 元岡古墳群 G-6 号墳・庚寅銘大刀の考察 — 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1355 集』福岡市教育委員会
- (3) 東野治之 2018「元岡 G-6 号墳出土大刀の銘文とその書風」『元岡・桑原遺跡群 30 — 元岡古墳群 G-6 号墳・庚寅銘大刀の考察 — 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1355 集』福岡市教育委員会
- (4) 光武英樹 2006「所謂、卑弥呼の鏡とされる『陳是紀年鏡』銘文の釈読（上）」「同（下）」『東アジアの古代文化』126 と 127
- (5) 岡村秀典 2017『鏡が語る古代史』岩波書店、220 頁
- (6) 鈴木勉 2019「岡村・光武氏らによる金石学的三角縁神獣鏡論について」『文化財と技術』第 9 号、工芸文化研究所
- (7) 豊島直博 2018「3 庚寅銘大刀の考古学的位置付け」『元岡・桑原遺跡群 30 — 元岡古墳群 G-6 号墳・庚寅銘大刀の考察 — 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1355 集』福岡市教育委員会
- (8) 鈴木勉 2008「百錬」と名付く — 鉄官の改廃と鉄の流通 — 『論叢文化財と技術 1 百錬鉄刀とものづくり』雄山閣、119 頁、鈴木勉 2008「百錬鉄刀の使命 — 東大寺山古墳出土中平銘鉄刀論 — 」『論叢文化財と技術 1 百錬鉄刀とものづくり』雄山閣、143 頁
- (9) 鈴木勉 2013「中平銘鉄刀と「鏡銘体」」『金壺集 — 石田肇教授退休記念金石書学論叢』
- (10) 鈴木勉 2016『三角縁神獣鏡・同范（型）鏡論の向こうに』雄山閣、新井宏 2005「鉛同位体比から見た三角縁神獣鏡の製作地 — 舶載紀年鏡等の複製問題を通して — 」『情報考古学』11-2、新井宏 2007「三角縁神獣鏡は魏鏡か」『理系の視点からみた「考古学」の論争点』、馬淵久夫 2018「三角縁神獣鏡の製作地について」『考古学雑誌』100 巻 1 号、水沢幸一 2019「三角縁神獣鏡の位相」『磨斧作針 — 橋本博文先生退職記念論集』、水沢幸一 2020「鉛同位体比分析からみた同一原料青銅製品群 — 古墳時代前期の鏡と鐙を中心にして」『三面川流域の考古学』第 17 号
- (11) 鈴木勉・金跳咏 2017「日本古代象嵌技術の起源と展開」『文化財と技術』第 8 号、百済には蹴り彫り象嵌技法の象嵌遺物が出土している。
- (12) 金閼恕 2010「中平銘大刀の銘文小考 — 文刀について — 」『東大寺山古墳の研究』
- (13) 孫机 1996「百煉鋼刀与相關之問題」『中国經史』遼寧教育出版社
- (14) 鈴木勉 2008「百錬鉄刀の使命 — 東大寺山古墳出土中平銘鉄刀論 — 」『論叢 文化財と技術 1 百錬鉄刀とものづくり』雄山閣
- (15) 福井卓造 2013「東大寺山古墳出土中平銘鉄刀における追刻の可能性」『金壺集 — 石田肇教授退休記念金石書学論叢』、49 頁
- (16) 森浩一 2010『倭人伝を読みなおす』筑摩書房、147 頁
- (17) 形聲字とは、許慎の『説文解字』にある「六書」の一つ
- (18) 加藤常賢 1970『漢字の起源』角川書店
- (19) 林裕己 2007「漢・三国・六朝紀年鏡銘集成 05」『古文化談叢』56
- (20) 福山敏男 1952「石上神宮七支刀の銘文」『日本建築史研究』（1968）所収、524 頁、林裕己 2007「漢・三国・六朝紀年鏡銘集成 05」『古文化談叢』第 56 集、55 頁
- (21) 山田勝美 1967『塩鉄論』明徳出版社
- (22) 『塩鉄論』はこれまで経済政策として評価され漢帝国の礎を作った政策として高い評価を得ている。しかし、2003

- 年李京華によって「供鉄限治」説が唱えられ、鉄の専売制度は周辺諸国の武力をコントロールする点に主な目的があるとされた。李京華 2003『中原古代冶金技術研究（第2集）』中州古籍出版社
- (23) 鈴木勉・福井卓造 2002「江田船山古墳出土大刀銀象嵌銘「三寸」と古墳時代中期の鉄の加工技術＜付説：法隆寺金堂釈迦三尊像光背銘の「尺寸」と「ろう製原型鑄造法」について＞」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』第25冊
- (24) 福山敏男 1952「石上神宮七支刀の銘文」『日本建築史研究』（1968）所収、524頁
- (25) 鈴木勉・河内國平 2006『復元七支刀 — 古代東アジアの鉄・象嵌・文字 —』雄山閣
- (26) 鈴木勉 2006「象嵌銘の積文法について」鈴木勉・河内國平共編『復元七支刀 — 古代東アジアの鉄・象嵌・文字』172頁
- (27) 古谷毅 1993「象嵌の観察」『江田船山古墳出土国宝銀象嵌銘大刀』吉川弘文館、東京国立博物館編
- (28) 東野治之 1993「銘文の釈読」『江田船山古墳出土国宝銀象嵌銘大刀』吉川弘文館、東京国立博物館編
- (29) 西山要一 2018「元岡G-6号墳・庚寅銘大刀が解く古代日本の象嵌大刀」『元岡・桑原遺跡群30 元岡古墳群G-6号墳・庚寅銘大刀の考察 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1355集』福岡市教育委員会
- (30) 鈴木勉 2006「3 形聲字の省画について」鈴木勉・河内國平編著『復元七支刀 — 古代東アジアの鉄・象嵌・文字 —』雄山閣、173頁
- (31) 鈴木勉 2014「金工技術から見る南北朝・百済・倭の交渉 — 百済金銅大香炉・藤ノ木古墳出土馬具をめぐる技術移転 —」『文化財と技術』第6号、80頁
- (32) 鈴木勉 2013「毛彫り刻銘技術の進化論」『造像銘・墓誌・鐘銘 美しい文字を求めて — 金石文学入門Ⅱ技術篇』雄山閣、73頁
- (33) 鈴木勉・金跳咏 2019「新たに発見した三国時代の彫金技術と「はがねの熱処理技術」の関係」『文化財と技術』第9号、140頁
- (34) 比佐陽一郎 2019「第2章 現代に甦った庚寅銘大刀」『庚寅銘大刀 重要文化財指定品と遺跡の紹介図録』14頁
- (35) 鈴木勉 2008「百練鉄刀の使命 東大寺山古墳出土中平銘鉄刀論」『論叢 文化財と技術1 百練鉄刀とものづくり』
- (36) 鈴木勉・河内國平編著『復元七支刀 — 古代東アジアの鉄・象嵌・文字 —』雄山閣、巻頭図版参照
- (37) 比佐陽一郎 2019「第6章 庚寅銘大刀を考える」『庚寅銘大刀 重要文化財指定品と遺跡の紹介図録』32頁